

あいちトリエンナーレ2010

堀内 研自

「都市の祝祭」をコンセプトにあいちトリエンナーレ2010は八月二十一日猛暑の中始まり、十月三十一日無事閉幕した。総入場者数は目標の三十万人を大きく上回り五十七万七千人に上った。こうした一大イベントに弊社も展示場所探しやインフォメーションブースのデザインで関わる事ができた。関係者として、また現代アートの一ファンとしてこの国際的な芸術祭をレポートする。

まちなかでアートを展示する場所を探す

あいちトリエンナーレ(以下あいちトリ)の芸術監督を務める建島哲氏を長者町の空きビルにご案内したのはもう二年前のことになる。まちなかでアートを展示できるスペースを探してほしいと芸術祭実行委員会からご依頼を受け、いくつかの空きビルを見学して頂くこととなった。その中でも特に印象に残っているのは、スターネットジャパンビルだ。そのビルは、真ん中に不思議な吹き抜けがあり、コンクリート造なのに木造の床で中二階が作られていたり、味のある木製の階段が付けられていたり、とにかく今の建築にはない不思議な魅力のあるビルであった。建島氏も「ここにしよう！」と興奮気味に歩きまわっていたのを思い出す。このビルは愛知出身のアーティスト渡辺英司がビル全体に自身でコッソツ手を加え、一棟丸ごとアート作品として昇華させてしまった。空きビルとなり半分朽ち果てようとしていた姿を知っている私にとっては大きな驚きと感動があった。

また、納屋橋会場となった東陽倉庫テナントビルも楽しみにしていた建物である。栄周辺で天井高さがあがる、二千坪程度の倉庫のような空間を探してほしいという難しい条件に対して足で探し出した物件である。ここでは、映像中心の展示が行われ、中でもヤン・フードンの十八台もの映写機を使用する作品では、昔ボリーリング場だった大空間がうまく活用でき

きたようだ。また、あいちトリの前はマンションのモデルルームとして使用されていたので、住宅の内装をそのまま活用したアートがあつて面白かった。

長者町だけで、ビルの壁面なども含めると二十九カ所、延べ約五千坪のスペースが会場として使用された。そして展示会場として使用された長者町の建物のほとんどは一年以上前から無償で借りられたそうだ。こうした地元の献身的な協力があいちトリを成功に導いたのである。

市内六か所のインフォメーションブース

あいちトリを市民にアピールするために市内六か所にインフォメーションブースを設置する企画に参加させて頂き、そのデザインを担当した。

ブースのデザインは親しみやすい愛嬌のあるものにしたかったため、動物のような家のような形にした。また、各ブースの色はその場所に合わせ、納屋橋では柳の緑、久屋大通の愛の広場では大空に溶け込むスカイブルー、能楽堂では和風の空間に合う紫、といった具合に決めていった。このブースでは案内や情報発信を行うとともにスタンプラリーも開催するので、スタンプ台を小さな「子ブース」としてデザインし、親子のブースを自由にレイアウトすることで空間を楽しく演出できるようにした。スタンプラリーは大盛況でスタンプを押すエコバッグは、途中からは枚数制限をしたそうだ。



久屋大通公園の「愛の広場」のブース
家に足が生えたような愛嬌あるデザイン。
奥はスタンプ台の「子ブース」

あいちトリが終わって

私自身、現代アートには大変興味があり、会期中、週末はもろもろのこと会場が近いので仕事帰りやちよつと空いた時間にも観賞することができ、ほとんど日常の一部となっていた。ぜひ三年後も開催して頂きたいが、関係者の話では巨額の税金を必要とするイベントだけにハードルも高いそうだ。しかし、あいちトリは名古屋の真ん中で開催され、アート観賞のような心のリハビリを最も必要としている働き盛りの世代が日常的に鑑賞できる時代になった。アートをアピールできる可能性を持っているではないか。仕事帰りに現代アートを堪能できるまち、それが名古屋のクールなライフスタイルとして定着する日を期待したい。



スタンプラリーは子供たちに大人気!
スタンプ台の「子ブース」は子供サイズでデザインしている。

COPYROOMとユーストリーム

藤澤 徹

はじめに

生物多様性条約第十回締約国会議(以降COP10)の最終日に、議長である松本環境大臣が涙をうかべながら木槌を打ち、決議したことは記憶に新しい。会期中には大きな議案に関わる会議からNGO/NPOが参加するさまざまなワーキングが開催された。期間中にマスメディアはニュースを通していくつかの情報発信していたが、実は会議の内容自体や会期中のイベント等についてはほとんど知らされていない。本編では、全国のNGO/NPOが主催したワーキングに事務局側で参加した立場から、会期中に頻りに目にし、且つ、私たちが実践した情報発信に関するトレンドを述べたい。

会期中のインフラの環境は、会場内では会場の隅々まで、公衆無線LANが提供されており、会議場外ではワイマックスを利用し各団体がそれぞれの回線を確保している、会場の内外問わず快適なブロードバンド環境が整っていた。国際会議ならではの目撃したところもあるが、この環境は数年前まで一般的ではなかった。ちなみに、2005年の愛・地球博では会場内での回線の確保が難しかった実感があるとともに、当時NGO/NPO団体の発信基地となった地球市民村内では同様の環境は整っていなかった。

ユーストリーム

COP10でのこのような環境のもと各団体は、さまざまな方法で情報を発信していた。特に際立っていたのが、Ustream(ユーストリーム、以降Ustream)を利用したライブ発信であった。Ustreamとは2007年に設立された米国発の動画共有サービスである。ライブビデオストリーミングなどのプラットフォームを提供するもので、さまざまなチャンネルネットワークで構成されている。動画視

聴者とのチャット機能や、視聴者からの投票機能などがある。先行するユーチューブや他のキャストシステムの良い部分を抽出したシステムといえる。最近では、グリーンメディアと呼ばれる環境系のメディアはマスメディアに頼ることなく独自の番組をUstream内に持ち、議論しあいユーザーを喚起している。

会場内では各ワーキングで決まった事案等そのままりポーターがライブ発信をしていち早く世界に届ける。その議論はそのまますt内でも議論となり様々な分野にまで派生していく。解像度の高い画像・映像も快適な環境のなかでどんどん発信されていく。必要な人員としては、リポーター一人、カメラマン件ディレクター一人が一般的であった。中には重要案件の会議そのものをUstreamしているチームも見られた。私たちのワーキングでは、各NGO/NPO団体への取材や、デイリーで発表された事案を発信した。

会場内で見かけたユニークな発信方法は、スマートフォンを利用したものである。各キャリアが競って発表するそれらは各アプリケーションソフトの充実から話題を呼んでいるが、最近では、搭載されているカメラ機能も充実しており、会場内ではいくつかの団体がそれらを利用してUstreamを実践していた。

まちなかで実践を

さて、このような情報発信は新しい機器やプラットフォームであるUstreamのようなサイトの存在があるからこそだが、もっとも重要なのは実践する側の情報リテラシーの向上である。COP10会場で見られた光景は、おそらく各団体のこれまで以上の情報発信への意識の向上の産物である。ところで、まちなかで側面技術として、地域育てや人材育成能力もその一つである。情報をつくり発信するキーマンを育て、是非とも地域メディアとして世に送り出すのはどうだろうか、これからのまちなぐりの主題である、観光・福祉・防災はまさにユーストリームが活躍する分野である。(※造語)